

盆栽の図像学

はちうえ

第十一回

三代 歌川豊国《四季花くらべの内 秋》

解説／田口文哉

浮世絵にみる江戸・明治の盆栽

秋の七草

秋の野に 咲きたる花を 指（および）
折り かき数ふれば 七種（ななくさ）の
花

萩の花 尾花 葛花 瞿麦（なでしこ）
の花 女郎花（おみなえし） また 藤袴 朝
貌（あさがお）の花

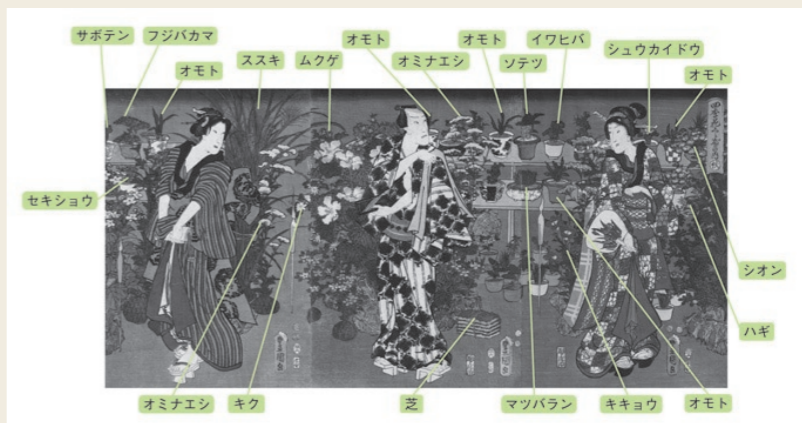
（山上憶良 『万葉集』 卷八 一五三七お
よび一五三八）

万葉集の歌人、山上憶良が詠んだこの歌
にちなんで、秋の七草は親しまれるよう
になったという。萩（尾花）薄（葛）、瞿麦（撫子）、
女郎花、藤袴、朝貌（桔梗を指す）、以上七

種の草花で、春の七草とは異なり、その色
やかたちを見て楽しむ植物である。今月の
一枚は、万葉の時代から親しまれたこうし
た秋の草花と、その前に立つ粋な男女の姿
を描いた一点である。まずはこの絵にあら
わされた草花の種類を見てみよう。

夜店の秋の草花

鉢植が並ぶ場所は、ろうそくの火が灯る
夜店の縁日。そこには三枚続きの横に長い
パノラマ画面を最大限に用いて、画面の右
から中央にかけて、そしてやや間をとって
その左側にも二段式の棚が設えられている。
棚の上には確認できるだけでも染付など色



ディスプレイ用商品とは異なり、主として購入して持ち
帰るための売り物だと考えられる。さらに前にいる人物
の脇には、背の高い植物が根巻きの状態で置かれている。
一番右にはシオンと萩、中央の紙にはムクゲと菊、その
左には女郎花と薄といった具合だ。中央紙右下には、束
ねられた芝も描かれている。

以上に挙げてきたような植物の種類をできうる限り書
き出したものが、右に挙げた挿図である（『美術コレクシ
ョン名品選』（さいたま市大宮盆栽美術館、二〇一〇年）
より転載。元図はさいたま市大宮盆栽美術館所蔵品。こ
こからもわかるように、この絵の背景は他の絵にはない

ポリュームで秋の植物に埋め尽くされている。そしてこ
れらを背景に、三人の人物たちが描きあらわされている
のである。しかしどうしたことだろうか、この三人はせ
っかくの夜店に背を向けて、買い物をするでもなくこち
らに向いているのである。この人物たち、いったい何者
なのだろうか。

隠された役者の姿

夜店の植木棚の前には三人の人物。これらの人物は、
実は単なる通行人ではなく、歌舞伎役者を描いたもので、
この絵が夜店前の情景を見立てた役者絵ともなっている
ことを理解しなければならぬ。そのために、三人の人
物の一人一人に隠されたコード（約束事）を読み取って
いこう。

まずは中央の男に注目する。男が左手にもつ紙入（財布）
には、朱で三本の筋が入っている。これは、市川家の定
紋「三柵」にちなむ三筋模様で、この絵の制作年代から、
男が八代目市川團十郎であることがわかるのである。次
に、左のお歯黒の女性が持つ懐紙には、挟まれた鎖の先
に根付の花がついており、この花が坂東家ゆかりの模様
である「花勝見」であることから、女性は初代坂東し
るか扮する人物をあらわしていることになる。そして最後
に、右側の女性が持つ団扇に描かれた季節外れの杜若（か
きつばた）からは、本連載第六回でもとりあげた、俳名「杜
若（とじやく）」を持つ三代目岩井兼三郎を当てられるの
である（参考・新藤茂「今月の表紙」、『歌舞伎座番付』
二〇〇六年九月所載）。

絵ならではの働き

このように江戸のスーパースターであった歌舞伎役者
をあらわした本図は、一枚だけをとっても独立したプロ
マイドのように見ることができ、そうして見ると、背
景の植物と前に立つ人物の取り合わせにも注目されるの
である。中央の団十郎の浴衣の染め模様は、背景に置か
れた染付鉢やムクゲの花の色と親和性を持ち、右の兼三
郎扮する女性の着物の紫色は、根巻きの桔梗やシオンの
花色などと同じだ。そして左のしゅかの着物の文様は、
薄の垂直のシルエットと重なっているのである。
こうした三人のスターと、三枚を揃えることでできあが
る豪華な植木棚の相乗効果が本作の見どころである。見
事な植木棚を舞台装置化することにより、絵の上では前
に立つ役者たちをより効果的に、華やかに盛り立てる絵
ならではの働きを、他でもない鉢植などの植物に読み取
ることができるのである。（続）

著者プロフィール
田口文哉（たぐち・ふみや）
さいたま市大宮盆栽美術館学芸員。
1977年生まれ。2009年、日本大学大学院芸術学研究科博士後期課程修了
芸術学博士。勤務先である大宮盆栽美術館では絵画部門を担当。四季のうつ
ろいにあわせ、盆栽があらわされた浮世絵を展示している。

三代 歌川豊国《四季花くらべの内 秋》
大判錦絵三枚続 左：36.9×25.3cm 中：36.7×25.4cm 右：36.8×25.3cm
嘉永6年（1853）6月 版元／辻屋安兵衛 個人蔵

浮世絵師紹介 三代 歌川豊国（さんだいうたがわとよくに）天明6～元治元年（1786～1864）
数多い浮世絵師のなかでも最大級の作例を残した江戸時代末期の絵師。はじめ歌川国貞と名乗っていたが、その後当時の人気
絵師の一人であった師匠歌川豊国の名を継いだ（本人は二代目と名乗っていたが、実際は三代目であった）。庶民が鉢植を楽
しむようになる時代に活躍した浮世絵師であり、多くの鉢植が彼の浮世絵版画に描きあらわされている。当時の鉢植・盆栽文
化を知る上で、最も参考になる絵師と言える。

さいたま市大宮盆栽美術館のイベント告知
■美術コレクション展2「中国の盆器」
概要：明時代（14～17世紀）のさかのぼる青磁鉢をはじめ、染付や泥
物盆器など、大宮盆栽美術館の所蔵する中国陶磁器の優品を選んでご
紹介いたします。
会期：平成23年9月10日（土）～10月19日（水）（毎週木曜休館）
同時開催：日本盆栽作家協会展 9月30日（金）～10月12日（水）
■埼玉県さいたま市北区土呂町2-24-3 ☎048-780-2091